

上高地山岳研究所「ミニ水力発電装置」 試運転で900Wの発電に成功

ミニ水力発電実行委員会常任委員 坂本正智



上高地山研の発電小屋

平成十一年十一月二十二日午後一時、小倉茂暉実行委員長(副会長)が一升瓶の栓を抜いて、装置周辺にお神酒を振りかける。

流量調整ハンドルがゆっくりと回されるとノズルから勢いよく水が吹き出し、次第に激しくなっていく。側面を内部の水車が見えるように高圧の透明プラスチックで特注されたケーシング内で、水の勢いを受けた水車が回り始める。

ミニ水力発電プロジェクト実行委員、山研委員、共同研究の神奈川工科大学、そして蓄電や配電盤関係で協力する日本電池(株)など関係者十六名が期待で見守る中、林エンジニアリング(株)の技師がハンドルを回して流量を増やし、回転数を上げてゆく。やがてデジタル表示板に九〇〇ワット発電の数字が点灯し、関係者からいつせいに歓声と拍手が沸き起こった。

長い歳月をかけて温めつづけてきた私たちの「夢」、自然エネルギー有効利用の実験施設「ミニ水力発電装置」は、上高地の冬と競争するよううにして完成し、ついに試運転に成功した。

試運転終了後、直ちに約五〇〇メートルの送水管、装置内部、放水管の水抜きを行い、発電小屋は板とシートで覆って雪囲いを済ませる。翌二十三日、今度は山研の給排水設備の水抜きと掃除などの閉所支度と雪囲いを終えて、居住者が野生動物の群れにとって代わった上高地を全員で後にした。

五ヵ月後、遅い春の訪れる四月上旬より再び一部の工事、装置の調整などを行い、五月のゴールデンウィーク明けには一キロワット発電を目標に本稼働の予定である。



2000 年 (平成 12 年)
2 月号 (No. 657)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

目次

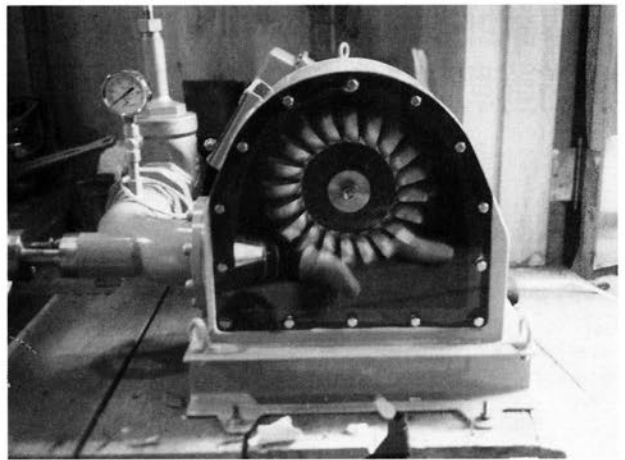
山研「ミニ水力発電装置」試運転で900Wの発電に成功	1
海外の山	5
「秩父宮記念山岳賞」の見直しについて	6
新入会員・図書受入報告	7
支部だより	
東海・東海岳人写真展	8
秋田・三つの百名山めぐり	8
秋田・タイムカプセルを埋設	9
報告	
丹水会・鍋割山へ	9
東西南北	
Because it's thereの原典を本誌で掲載しませんか	10
「山」654号「モン・ブラン情報」に補足	10
INFORMATION	13
会務報告	14
会員異動	15
ルーム日誌	15

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10~20時
水・金……………13~20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10~18時

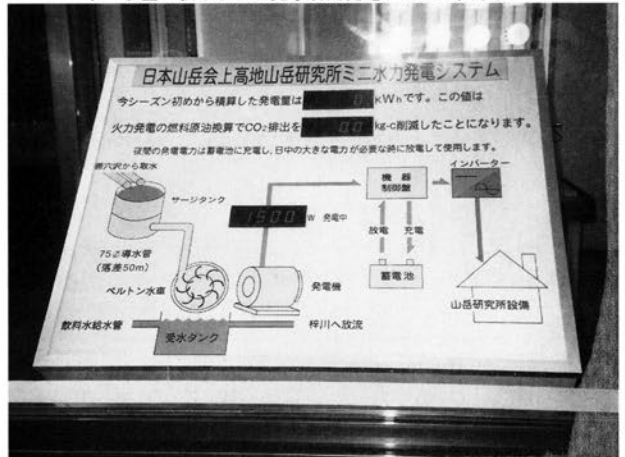
実験のための発電施設構想、具体的計画案、関係諸官庁への折衝と許可申請、そして工事着工から試運転まで、長い年月をかけた計画だったが、その最初から関わっていた者の一人として、実現までの経過と今後のモデルケースとしての実験などについて、少し述べてみようと思う。

■発電施設構想

平成三年（一九九二）十月に会員でもある神奈川工科大学の鳥居亮名誉教授、森武昭教授（現水力発電常任実行委員）と一緒に大分県の林社長（林エンジニアリング株）が閉所



上・発電装置は出力1kwの横軸単流単射ベルトン水車
下・小屋に収められた見学者用発電システム表示板



準備中の山研に來られ、そのときに善六沢の飲料水取入口付近まで上がって、山研における水力発電の可能性について調査された。

神奈川工科大学の自然エネルギー利用研究グループで山小屋の風力、太陽光、水力の利用・普及に努めておられた鳥居教授は、以前から山研の水力発電の可能性を話し、「山小屋のモデルとなる発電装置の実現」を私たち委員に説いておられた。林社長はその後数回山研に來られ、森教授と私の三人で、善六沢の取水口予定地から山研までの落差をハンドレベルで測定したが、高低差は五

メートルあり、十分に発電可能であるとの結論であった。

老朽化した山研は平成三年（一九九二）十月末をもって取り壊し、翌年から新築工事が始まった。平成五年春から新山研はオープン、村木潤次郎会長名で平成八年に計画案を環境庁に提出した。またこの趣旨に賛同して電気事業連合会の東京電力（株）、中部電力（株）、それに日本原子力発電（株）の三社より総額五百万円の寄付がすでに寄せられており、発電施設構想は現実の計画として動き始めてきた。

■許認可の申請

小規模水力発電設備の普及を阻害していた電気事業法が平成七年に改正され、それまでは大型と同様の技術基準、検査などを必要とされていたものが、発電出力一〇キロワット未満の発電装置は技術的進歩および保安の自己責任原則の徹底を背景に一般電気工作物となり、これによって発電設備の設置が容易となった。

平成十年からは頻繁に環境庁の上高地担当官に計画についての具体的

内容を説明し、十一年三月になって改めて「モデルケースとしてのミニ水力発電装置」の許可申請書を提出した。同時に、上高地は「特別名勝」および「特別天然記念物」であるために、安曇村教育委員会を通じて文化庁へも「現状変更」の許可を申請した。

新しく作る発電小屋は松本営林署より貸付を受けている山研の敷地を少し追加貸付する予定で、この件についてはすでに平成十年に両者で了解済みであった。ところが十一年三月に組織が再編されて名称も中信森林管理署となり、先の了解済みであった事項すべてが白紙に戻るという結果となってしまった。

発電小屋は山研裏の東寄りを当初は予定していたが、追加貸付は不可能となつて、反対の西寄りに変更を余儀なくされてしまった。おまけに貸付地境界が明確でなく、測量しながら境界の復元をしなければ森林管理署の新築許可が出ない。こんな中で、四月になって河川法の問題が持ち上がった。文化庁への申請書が長野県自然保護課に回った際「河川法の問題は？」と照会があった。

実行委員会がこの計画を進めてゆくに当たり、河川法問題は検討事項となっていた。しかし予定している善六沢は梓川の枝沢であり、取水を

予定している場所はその沢に入ってくる小さな流れ——つまり梓川の枝沢の枝沢で、山研が長い間生活用水として利用しているところでもある。意識の中に既得権のようなものもあって、枝沢のほんの少しの水を引き、発電に利用した水も一部を山研の生活用水として使用するほかは、すべて梓川に放水することもあり、この問題はすでにクリアされているとの認識であった。

このような実行委員会の認識だけでは、県側も申請書を出すわけにもいかず、きちんとした確認を建設省からとって欲しいとのことであった。

四月中旬、長野市の北陸地方建設局千曲川工事事務所にある占用調整課を訪ね、日本山岳会が計画している発電装置を説明し、河川利用についての指導を仰いだ。担当官は「今回は河川法の説明だけで……」と前置きして、

①水力発電に関しては、その規模の大小を問わず同一とみなす。

②善六沢は準用河川(普通河川)であるが、発電として利用する場合は一級河川の扱いとし、建設大臣の特定水利使用の許可を受けねばならない。

③準用河川を一級河川指定とするためには、まずその河川を管轄する市町村から都道府県へ要望し、調書を

作成して地方建設局に提出する。

④「一級河川指定等の調査」は河川局長通知で毎年六月にあるが、それに間に合わせるように③を行うには事前の調査などもあつて今の時期からでは遅すぎる。来年度(平成十二年)になつてしまふであろう。

⑤仮に今年度の「指定等の調査」に間に合ったとしても、「決定」をする河川審議会は年一回、年度末に開かれるために、平成十二年三月でないと結果が判明しない。したがって現行法規上では、この計画が許可されるとしても、平成十二年四月の新年度となる。

何てことだ！順調にいつても一年の遅れとなつてしまふ。ここまでやると積み重ねてきたものがガラガラと音を立てて崩れてゆく感じがしてしばらくは茫然自失状態であつた。

そんな気配を察したらしく、「日本山岳会の趣旨は充分に理解できたので、私なりに何かよい方法があるか調べてみる」との言葉に、藁をも掴む思いであつた。ちなみに今までにこの種の相談・申請はなかったように記憶している、とも話していた。とにかく大変なことになつてしまひ、文化庁、環境庁への申請書が途中で止まったままになった。送水管施設や発電小屋新築工事などは、それまでの経過から、遅くとも六月着

工、八月発電開始のスケジュールで、資材、工事業者などの手配もしていた。この段階で二年先に延びるといふことは、最悪、計画の中止も考えられる。建設省の見解を聞いた実行委員会は暗いムードになつていった。

関係省庁に日参するようにして解決の糸口を探っていた六月中旬、北陸地方建設局としての見解が出た。普通河川といえども、新規の水利使用が実行されると下流の維持流量や既得水利に悪影響を及ぼし、水利秩序を乱す恐れがあるので、今計画のような「普通河川において発電が計画された場合、法河川に指定して特定水利使用として扱う」のが原則で

あるが、今回は短期間の実験施設であり、取水量も小規模、取水口から放水口までの間に他の水利使用者がいらない。またダムなどの設置も予定になく、取水による河川環境への影響も少ない。以上の理由で、今回のケースに限り安曇村の普通河川の管理に関する条例(安曇村公共物管理条例)に基づいて許可する、というものであつた。ついに最大難関突破である。

この文書を小倉実行委員長と二人で千曲川工事事務所へ受け取り、その足で松本に向かい、安曇村役場振興課を訪ねて申請についてお願いをした。そして七月末に、待ちに待

●新ハイキング選書●

藤井寿夫著

中央線の山を歩く

A5判・286頁・定価1680円(税込)

中央線の山を歩いて50年、中央線の山107座の紀行と案内。朝立ち、日帰りの範囲内、あまり登山者の歩かれていない山に重点を置いている。読物としても楽しい。最新刊 増刊出来

●深田クラブ編●

深田久弥の研究

読み、歩き、書いた

飯島齊 高澤光雄 高辻謙輔 深田クラブ編集部 共著

A5判・387頁・定価1680円(税込)

深田久弥の研究に造詣の深い三氏が、深田クラブ会報に、永年にわたり発表された成果をまとめたもの。深田久弥はこの一冊で全貌を顕す。

新ハイキング社

東京都北区滝野川 7-6-13
電話・FAX 03(3915)8110

った「河川使用許可」が安曇村より届いた。文化庁、環境庁への申請書の差し換えも終え、梓川への放水に利用する遊歩道の排水溝拡張工事の認可も四月に長野県生活環境部より受けており、中信森林管理署を除いて、「ミニ水力発電装置」設置へのすべての届出は終了し、後はその許可待ちとなった。

九月に入って続けて許可が届き、予定になかった貸付敷地境界線復元、発電小屋予定地変更による共同テレビアンテナと埋設ケーブルの移動を残して、いよいよ計画は最終段階へと入った。

復元の測量は林野弘済会に依頼し、その日程を決めた矢先の九月十五日、釜トンネル上高地側出口付近での崩壊事故で、またまた測量も月末までずれ込み、「国有林野貸付使用」「国有林野貸付使用地内工事施工承認」「国有保安林内立竹伐採等」の三通の申請書類をそろえて森林管理署に提出できたのは、十月も一週間以上過ぎてからであった。そしてこの計画のために必要な最後の許可書が届いたのは、上高地に初雪の訪れもあるという十月二十五日。もう後のないところまで来てしまっていた。

■工事着工から試運転成功まで

何度も着工予定の変更で、工事従

事者の手配もできないでいた松本土建(株)を口説き、やっと発電小屋の工事が始まったのは十一月四日である。工機が入って基礎工事がスタートしたのを見てみると、やっとこれで長い歳月をかけて温めてきた「夢」が実現するのかと、工事に立ち会った実行委員も感無量であった。

小規模水力発電装置は、アメリカ、カナダ製が価格も手ごろではあるが、メンテナンスなどの関係もあつてエンジンニアリング(株)製の出力一キロワットの横軸単流単射ペルトン水車に決定し、装置一式は山研に納入された。これは当会の自然エネルギー有効利用のモデルケースという趣旨を理解してくれた特別価格であった。発電機制御盤や蓄電池、見学者用のシステム表示板などの電気関係は日本電池(株)が引き受けてくれた。また発電小屋は、山研新築の業者である松本土建(株)にお願いした。

善六沢支流の取水口から小屋までの送水管は、三インチ黒のポリパイプを使用して約五〇〇メートル。学生部の若い諸君の力を借りて敷設した。発電後の毎秒五リットルの水は五インチの塩ビパイプで一五メートルを、途中で山研の生活用水に使用するために分岐させて受水層に引き、後は沢から治山遊歩道を横切つて梓川に放水する。

これら発電小屋以外の工事は、すべて実行委員、学生部、神奈川工科大学の手で行われた。その材料費、他に境界の測量、テレビ共同アンテナ移動、交通費などを含む諸経費と、この発電装置に關しての費用は、総額で一千万円に近い額となった。

工事途中で一度降雪もあったが工事に支障もなく、小春日和の暖かい毎日で、予定通りの十九日に発電小屋は完成した。白銀に輝く穂高連峰を眺めながら二十日に実行委員、神奈川工科大学、日本電池などの業者が山研に入り、発電装置の据え付け、取水口から小屋までの通水、そして試運転といよいよ最後の工事を行う。そして二十二日、予想を大きく上回る九〇〇ワット発電に成功したのであった。

実行委員それぞれが別に自分の仕事をもち、その合間を見ての打ち合わせ、工事と、肉体的にも経済的にも大変な労力が必要とした一年間であった。試運転の成功は、それらすべてを一瞬のうちに忘れさせるすばらしいものだった、拍手と歓声の中で「本当にご苦労さまでした」と一人一人にお礼を言いたかった。

無理を承知で引き受けてくれた業者の皆さんは無論のこと、関係する諸官庁も何かと相談に乗ってくれた。しかし今回の一連の許可申請にお

いて、一方では規制緩和を唱えながら、まだ規則、法律という厚い壁が立ち塞がっていることは否めない事実である。個人的には何かと助言いただいた好意的な担当者にしても、やはりその壁を越えることの難しさを、私は実感した。一本化し、その結論が短時間で出るような行政のあり方を望むのは、やはり無理なのであろうか。

■発電本稼働、そして実験へ

今年五月中旬をめどに春早くから上高地入りし、送水管などの追加工事や発電装置の調整を行う。本稼働後は施設を一般公開し、委員および山研管理人が見学者へのインタープリターとして、自然エネルギー有効利用や環境保全などの啓蒙を行うことにしたい。作られた電力は当面は山研資料室の一部の照明と生ごみ処理に使用し、データを収集したいと考えている。将来的には、し尿処理システムなども視野に入れた実験を計画している。

今後の各種実験、データの収集方法などについては現在検討中であるが、逐次「会報」、「山岳」誌上で報告していきたい。

新しい年二〇〇〇年は、上高地山岳研究所が名実ともに「山岳研究所」となる、そのスタートの年である。

海外の山

「8850m」を
どうするか

江本嘉伸

8850m? 中央ロブク氷河から見上げるチョモランマ
撮影・江本嘉伸

エヴェレストの標高はほんとに二メートル高かったのか。

三カ月前、ナショナル・ジオグラフィック・ソサイエティとボストン科学博物館が共同で発表した世界最高峰の標高修正について、ネパール政府は二月初め、はじめての公式見解を示し、アメリカ隊の新標高を当面採用しない方針を明らかにした。

ネパールの国土改良管理省スポークスマンは、この中で新標高につい

ては「科学的根拠を分析する必要がある、その作業は測量局によってすでに開始されている」と述べ、それまでは従来通り「八八四八メートル」を世界最高峰の公式標高とする、と表明した。

ナショナル・ジオグラフィック・ソサイエティは、今回発表した「八八五〇メートル」を正しいものとの前提でヒマラヤの地図の書き換えを表明しているが、ネパール政府が同意しない中で、世界がそれを公式標高とすることは、疑問だ。

ヒマラヤの高度の測量は、ヒマラヤから遠く離れた観測点から経緯儀によって行われてきた。いわゆる三角測量方式で、エヴェレストの山名ともなつたジョージ・エヴェレスト(元インド測量局長官)は、インドの子午線を測定し、エヴェレストの回転楕円体の算出を可能にした功績で知られる。

最初の測定は、ガンジス平野の六箇所の観測点から観測された平均値で「二九〇〇二フィート(八八四〇メートル)」と算出された。一八五二年のことで、日本が黒船の襲来におびえていた百五十年前、世界最高峰の標高に關してかなり正確な数値が観測されていることに驚く。

一九四九年にネパールが開国され

たことで従来より高く近い地点からの観測が可能となり、一九五四年「二九〇二八フィート(八八四八メートル)」と新たな数字がインド測量局のB・L・ガラティーによって算出された。これらの経緯は、メイソンの名著「ヒマラヤ」(白水社刊、田辺主計、望月達夫訳)に詳しい。それから半世紀後の一九九九年五月五日、アメリカ隊の七人の登山家たちは、GPSシステムを使った衛星情報を利用して「二九〇三五フィート(八八五〇メートル)」という新たな標高を得、そのことを十一月に発表した。この時の調査で、ヒマラヤが北東方向に毎年六センチのスビードで動いている、とも明らかにされた。

だが、このたびのネパール政府の見解表明で、新高度の発表についてアメリカ隊がネパール側と相談も情報提供もしていないことが明らかになつた。「調査データを分かち合うよう、何度も請求したが、応じなかつた。彼らがデータを提供し、高度が正しく高くなっていることを我々に証明しない限り、従来の標高を採用する」と、スポークスマンは言っている。

随分とおかしな話だ。長いヒマラヤの測量の歴史で、常に問題となる

のは、高度を測る基点となる「山の底」、つまり海水面にあたる場所はどこか、「雪の頂」ではない。「岩の頂」をどうすれば正確に測定できるか、というような命題であつた。海から遠く離れた内陸に位置するヒマラヤの海水面からの高さを決定する作業は簡単ではなかつた。また、エヴェレストもK2も、頂上は厚い雪に覆われており、その厚さは年によって、あるいは季節によって違ふ。ほんとうの頂上は、雪の下に埋まっているわけだが、それをどう計測するか。

ガラティーの場合、十二月から三月の、雪の厚さの最も少ない時期をねらつて測量した、とされる。にもかかわらず今回の結果は二メートル低くなつたのではなく、高くなっているのは、エヴェレストの「底」をどこに位置づけるか、の命題と関わることだろう。

中国が標高の変更を認めたという話も聞かない。決着まで曲折がありそうだが、いずれにしてもネパール、中国チベットの国境にそびえる山の標高を、その国の理解なしに変えることにはムリがある。すでにあらゆる地図、報告書に記載されている数字だけに、その確定の方法は十分議論されている。

「秩父宮記念山岳賞」の見直しについて

副会長 竹内哲夫

一、実施大綱と実施細則の改正

「秩父宮記念山岳賞」は平成十年に創設され、第一回は二件の業績が表彰されました。しかし昨年第二回の選考を行いました。該当する業績が残念ながら見当たらず、表彰は見送りとなりました。

これまでの二回にわたる審査、選考の経験から、いくつかの点で、実施大綱、実施細則の見直しが必要であるとの大方のご意見を踏まえて、昨年来何回にもわたる改正試案の検討の結果、本年一月十二日の理事会において改正が承認されました。

したがって、今年の年次晩餐会での表彰に向けて、この新しい実施大綱により審査、選考が行われることとなります。今回はぜひ受賞業績を見つけ出し、受賞者の表彰が実現するようにご協力をお願いいたします。

二、見直しのポイント

(1) 表彰の対象分野

イ、登山活動。ロ、山に関する文化活動。以上の二分野に大別した。イの登山活動では、これまで「優れた」登山活動とあったところを

登山活動のみとした。日本山岳会が評価に値する登山活動と認めたものが表彰されることになる。ロでは従来諸科学の研究活動の色が強かったところを大幅に対象を拡大したので、山に関するほとんどの分野が範囲に含まれる。そのために従来の芸術関係は削除した。

(2) 運営委員会・審査委員会の二本立てを改め審査委員会に一本化

本賞の創設に当たっては、賞の趣旨、審査のための組織手順、表彰対象の業績、受賞者の範囲など、本会が初めて経験する表彰事業のため、審査に先立ち運営審査の枠組全般の検討を行う必要から運営委員会が必要であったが、ほぼその役割を終えたので、今回は審査委員会だけに改正された。

(3) 推薦者が業績を提出

これまでの応募状況を見ると、本人から申し出があり、極端な場合では推薦文まで応募者本人が作るようなケースがあった。会員や本会の諸組織、グループなどが、賞に値する業績が周辺に存在する

ときは、積極的に推薦を行っていただくようお願いしたい。業績当事者本人の自薦ではなく、推薦者の業績への評価、考え方を明確になるように、実施細則においては本人ではなく、推薦者は「その業績について十分審査を行うことができるように、次の資料を事務局に提出しなければならない」として、その中で推薦理由を明記した推薦書が求められている。

(4) 審査の対象となる期間

今回から推薦は当年限りとなる。従来は一度提出された業績は二年有効とされたが、一年限りになる。しかし再推薦はできるので、たとえば次年度に同じ業績を推薦することは許される。

三、審査スケジュール

今年も七月末までに推薦を受け、審査を終えて十月中旬に結果を会長あてに報告し、遅くとも十一月の理事会で、受賞業績と受賞者を決定し、晩餐会で表彰する運びとなります。

以下に改正された実施大綱と細則を掲載します。

「秩父宮記念山岳賞」の創設について

本会は、平成八年八月秩父宮家より遺贈金一千万円を拝受し、これまでその有効な使途について検討を重ねてきた。その結果、故秩父宮殿下及び同妃殿下と本会との長いご縁を考えたとき、本会としては山に関する諸業績について「秩父宮記念山岳賞」を創設し、永く両殿下のご事跡を記念することが最も適切であるとの結論に達したので、平成十年度から「秩父宮記念山岳賞」を創設し、表彰を行うこととした。

「秩父宮記念山岳賞」実施大綱

(平成十年五月十六日制定
平成十二年一月 一部改正)

一、目的

山について造詣の深かった故秩父宮殿下及び同妃殿下のご事跡を永く記念するため、山に関連する顕著な業績に對してこれを表彰し、もって登山活動の奨励と山岳関連諸文化の高揚に資することを目的とする。

二、名称

「秩父宮記念山岳賞」

三、表彰の対象分野及び受賞者

(1) 表彰の対象分野

イ、登山活動

ロ、山に関する文化的活動

(2) 受賞者

イ、(1)の項の各分野において顕著な業績のあった個人またはグループ。

ロ、受賞者は本会の会員、またはその業績に関して本会の会員が顕著な貢献を

- 行つた団体(学会を含む)に限定する。
- 四、審査委員会
- (1)「秩父宮記念山岳賞」の選考に当たり、その審査を実施するために審査委員会を置く。
- (2)審査委員会に委員長及び委員若干名を置く。
- (3)委員は理事会及び学識経験者のうちから、理事会の議を経て会長が委嘱する。
- (4)委員長は委員のうちから会長が委嘱する。
- (5)委員の任期は二年とする。但し、引き続き二年の再任を妨げない。
- (6)業績を推薦した者は、その業績が審査を受ける期の審査委員とはならない。
- (7)審査委員会に事務局を置く。事務局に会長が委嘱する事務局長及び事務局員若干名を置く。
- 五、推薦、選考、表彰
- (1)会員または本会の諸組織(委員会、支部、同好会等)は、「秩父宮記念山岳賞」に値すると考える業績があるときは、毎年七月末までに、その業績を審査委員会に推薦する。他の団体が、本会会員が顕著な貢献を行った業績を推薦しようとするときも同じとする。
- (2)審査委員会は推薦のあつた業績を審査し、「秩父宮記念山岳賞」にふさわしいと認めた候補業績を推薦理由を付けて会長に推薦する。
- (3)会長は審査委員会から推薦された候補業績を理事会で審議し、受賞者を決定する。
- (4)表彰は毎年の年次晩餐会で行う。
- (5)受賞者には表彰状及び副賞を授与する。
- 六、その他
- (1)本会は「秩父宮記念山岳賞」基金の増額に努め、もつて本賞の継続発展をはかる。

- (2)この実施大綱に定めるもののほか、審査の実施にあつて必要な事項は審査委員会で定める。

「秩父宮記念山岳賞」実施細則

一、審査委員会

- (1)審査委員会は「秩父宮記念山岳賞」(以下「山岳賞」という)の円滑な審査の実施をはかるため、必要に応じて随時開催する。

- (2)審査委員会は審査委員長が招集する。

- (3)審査委員長が不在等の場合、委員のうちから互選によつて委員長代行者を選ぶことができる。

- (4)特別な業績の審査のために必要な場合、審査委員長はその都度特別審査委員を委嘱することができる。

二、推薦、審査、発表

- (1)「山岳賞」に該当すると考えられる業績を推薦しようとする者は、その業績について十分審査を行うことができるように、次の資料を事務局に提出しなければならない。

- イ、業績の名称

- ロ、候補者(個人またはグループ、団体)名及び個人の場合はその略歴

ハ、業績の概要

- ニ、既に発表の報告、論文、文献、作品等があればそのリスト

- ホ、推薦理由を明記した推薦書

- (2)事務局は「山岳賞」の審査を受けようとする業績の受付にあたり、(1)の要件を満たしているかどうかを点検しなければならない。

- (3)業績の推薦は当年度限りとする。

- (4)受賞者の業績は年次晩餐会会場で発表するとともに次年度の「山岳」に業績の概要を掲載する。

図書受入報告 (1999年12月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
倉持裕至	栃木273山：女房殿と歩いたりハビリ山日記	322pp/21cm	白山書房	1999	出版社寄贈
JAC学生部指導委員会(編)	全国大学山岳部監督会議(1998年度)	141pp/22cm	JAC学生部指導委員会	1999	当会発行
桜井義雄(編)	法政大学体育會ワンダーフォーゲル部総部50周年記念誌(1950-99)	261pp/26cm	法政大学体育會ワンダーフォーゲル部	1999	発行者寄贈
三井嘉雄(訳)	ウォルター・ウェストン未刊行著作集(上巻)	372pp/22cm	郷土出版社	1999	出版社寄贈
三井嘉雄(訳)	ウォルター・ウェストン未刊行著作集(下巻)：巻末索引つき	338pp/22cm	郷土出版社	1999	出版社寄贈
畦地梅太郎	山の眼玉(平凡社ライブラリー No.313)	189pp/17cm	平凡社	1999	出版社寄贈
塩田純一	中高年登山者のための生理学(登山シリーズ No.1)	188pp/21cm	本の泉社	1999	出版社寄贈
名古屋山岳会(編)	ダウラギリⅡ(1978)：名古屋山岳会登山隊報告書	98pp/30cm	名古屋山岳会	1999	発行者寄贈
秋元常夫(写真)	春夏秋冬(写真集)：秋元常夫遺稿集	／31cm	秋元常夫兄弟一同	1999	発行者寄贈
J.ヘムレブ 他	そして謎は残った：伝説の登山家マロリー発見記	341pp/20cm	文藝春秋	1999	出版社寄贈
Jochen Hemmleb et al.	Ghosts of Everest: The Authorized Story of the Search for Mallory & Irvine	205pp/25cm	Macmillan	1999	購入
John Biggar	The Andes: A Guide for Climbers [Revised 2nd ed.]	256pp/21cm	Big R Publishing	1999	出版社寄贈
Light Hunter (ed.)	Dolomiti: Viaggio Attraverso un Regno Incantato	143pp/30cm	Light Hunter	1999	片山隆市氏寄贈

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

東海支部

第七回東海岳人写真展 —山と自然のパフォーマンス—

今年で七回目になる写真展で、二年ごとに十四年前から開いてきたものである。十一月三十日から十二月五日の六日間、名古屋の中心部、中区市民ギャラリーで開催。中日新聞社との共催、中部日本放送の後援で行われた。

出品作品は約八十点で、日本の山が半数、残りが世界の山々。カラコラム、ネパール、インドなどヒマラヤ各地、天山、カナディアン・ロッキー、欧州アルプスなどなど、東海支部の登山活動がグローバル化していることを物語る力作の数々が来観者の足を止めていた。

出展者も初心者から熟達者、男と女、青年から熟年と各ジェネレーションにまたがり、この写真展を盛り立てようとする東海支部の層の厚みと熱意がうかがわれた。

来場者は三千九百人を超えた。これは市民ギャラリー始まって以来の新記録とか。交代で会場に詰め、説明にあたる出品者たちの忙しそうな様子が、会の大盛況を示していた。この盛り上がりは、次のような要素から成り立っているように思う。

一、作品の質、量の充実。多様性の拡張、すなわち多様な登山の楽しみ方が一般化したこと（出展者、観客双方ともに）。

二、写真展を支え、盛り立てるため



賑わう写真展会場

に百人を超える会員が、陰になり日向になり、労を惜しまず働いた。また、家族、親類、岳友、勤務先などの人々に動員をかけた。来観者を増やした。

三、共催の中日新聞社での窓口は社会事業部だが、この部長が石原俊洋会員。彼の肝煎で、中日紙上で数回にわたって取材記事つきで出展作品の紹介を連載した。東海三県で七〇パーセント前後の購読シェアを持つといわれる中日のマスメディア・パワーは偉大である。これを読んで足を運んだ一般参観者は多かった。

第一回からずっと写真展を主管、采配してきた写真家の鈴木重彦会員は言う。「初期の数回は作品の数をそろえるのにも苦労するありさまだった。支部員の関心も低かった。こんな大盛況に発展するとは夢のようだ。今回は市民ギャラリー最大展览展示室でも応募を収容しきれず、出展できない人を十数人も残したのが残念で仕方がない」。

人をけしかけて無償の労働に駆りたてる名人、尾上昇前支部長は「第八回の二〇〇一年は、支部創設四十周年にあたる。写真展もそれに合わせパーツと盛大にやりましょう、パーツとね。展示室を二つ借りて倍の

スペースで、写真も倍に増やせばいい。永年写真をやっててそのくらいのができんてどうする。エエ鈴木さん」と言って、倍増する会場費のやりくり、写真集めの苦勞を思っ

て浮かぬ顔の鈴木会員の傍らで、涼しい顔でビールの杯を干していた。

ともあれ写真展は名実ともに支部あげての行事に育ち、東海支部五百人を超える人々（支部友をふくむ）の絆を深めるものになってきたように思う。

二〇〇一年にはこの欄でさらなる盛況のご報告ができますよう願って筆を擱きます。（橋村一豊）

秋田支部

全国支部懇談会と 三つの百名山めぐり

秋田支部設立四十周年記念行事の第四弾は、全国支部懇談会への参加と、開催地の大垣市周辺など帰路上にある三つの百名山登山を組み入れたの実施となった。

十月十五日の夜、若月リーダーのもと、支部会員八名がレンタカーで一路岐阜県へ。翌十六日、予定より早目の到着となり、まずは伊吹山を散策。下山後、関ヶ原と珍品堂などを見学し、会場のある大垣フォーラムホテルへ。同ホテルで、電車でき

た佐藤支部長、北林副支部長と合流。集会は、岐阜支部一同の心のこもった歓迎ムード一色で、所定のセレモニーが行われた。十七日の懇親登山・養老山も、晴天のもと和気あいあいと楽しい一時を過ごさせていた。

終了後、一路隣県の大野市へ向かった。深田久弥定宿の扇屋旅館に泊まり、翌早朝荒島岳へ。小荒島岳を経て下山したが、林道脇のたわわに実るアケビには感嘆した。なぜ百名山なのか……との疑問を残し、最終目標の白山への登山口に向かう。途中にある永平寺を参拝し、白山温泉の御前荘に泊る。

十九日の早朝、暗闇の中を出発した。日本三大霊山のうえ、国立公園とあって、登山道は実に立派に整備されており、まさに高齢者、山岳信仰者向けである。

数日前に降った初雪を見ることができたし、山頂に着くと同時にガスも晴れ上がり、雄大な眺望を楽しませてもらった。奥宮で旅の安全を祈願してから下山し、新潟港へと向かった。天候にも恵まれ、堪能した五日間であった。

前年の当秋田支部主管で実施した男鹿半島の本山登山は船で出発したが、今度は逆に船で秋田港への帰路になった。

(佐々木民秀)

二十一世紀へ タイムカプセル埋設

当支部創立記念事業の一環として、新時代の二十一世紀へタイムカプセルを送り出すことを思いついた。その埋設を記念事業と位置付ける意味で、十一月二十日に開催された秋田支部創立四十周年記念祝賀会の席上、カプセルの除幕式と閉める式を行った。除幕を本会来賓、大森薫雄副会長他三名、閉める式を佐藤支部長他二名にお願いし、宴たけなわを見計らって、冬山の標識用の真紅の布が引き下ろされ、黄金にメイクされた「タイムカプセル」が参加者一同に披露された。

これは「支部会員共通の目的を作り、次の節目に掘り出すという楽しみと期待が会員の心を一つにし、会の発展向上につなげる」と意味づけ、第七弾の記念行事として秋田市の某所に埋設。十年後の意義深い節目にオープンする予定である。

やがて二千年紀を迎え、二十一世紀へと時を移してゆくが、山をジョイントとして、このようなささやかな会員相互の連なりが、本会を中心として「うねり」となり、グローバルな役割を果たすべく、さらに発展することを願ひ、このカプセルを送り出した。

(佐藤 税)

報告 2月

丹水会・第三十七回集会

鍋割山へ

第三十七回丹水会集会は、十一月二十七、二十八日に寄（やどろぎ）の民宿仙田で行った。記念すべき二〇〇〇年が創立二十周年とあって、集まりは順調。宿舎も宿の女将の計らいで他の客はいいさいお断りの豪華？な一夜である。恒例の講演は塔ノ岳山荘の主花立氏。講演というよりは参加者との懇談形式で、普段は聞けない山小屋の苦労話などにもおよび、和やかに進んだ。

翌日は栗の木洞から大倉コース、鍋割山頂と二コース、三パーティーに分かれ、自分に応じた体力でそれぞれの一日を楽しんだ。(古谷雪司)

寄沢から鍋割山

車道歩きは退屈だが、青空が広がり雑木の紅葉は真っ盛り。車道歩きから寄沢に下りて、しばらくは荒れた沢歩き。途中ロープが張られた白い崩壊地を這い登って、右岸の小尾根に取りつく。鹿に食い荒らされたり、笹が枯れて裸地化した斜面を登りつめると鍋割峠。

古い小さな石仏が鎮座する。雑木林の尾根をしばらく急登すると広々とした鍋割山頂である。Mさん持参のシャルドネワインと鴨のスモーク、川崎精雄さんの庭で収穫された「長寿の柿」などの珍味の披露、もちろん配給の缶ビールも開けた。

眺めは絶景。前に箱根連山、頂稜部を雲に隠された赤石山脈、主脈越しには奥多摩や奥秩父が頭をのぞかせて、ぜいたくな展望。いまや丹水会の古参会員になりつつある小生も、今日は記念すべき丹沢初登山、感動したものだ。

(松沢節夫)

後沢乗越から鍋割山

後沢乗越経由のパーティーは、総勢二十名。栗の木洞―大倉パーティーと前後して仙日山荘から宇津茂集落までいったん戻り、茶畑の先にはどかに広がる集落を眺め、急な斜面を滴り落ちる汗を拭いながら礫山、栗の木洞と暗い林の中を進む。後沢乗越からは急な登り。一気に鍋割山に到着し、先に到着していた寄沢組と合流した。目前に広がる光る相模湾、そこに浮かぶ伊豆大島、初島などを望み、目にまぶしい紅葉とともに晩秋の丹沢を十分堪能して、一九〇〇年代最後の印象深い山行でもあった。

(込田伸夫)

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度でお願いします)



イラスト・宇都木慎一

Because it's thereの原典を本誌で掲載しませんか

本多勝一

マロリーの言葉として有名な「Because it's there」は日本語として未だに「そこに山があるから」と訳され、マロリーの精神とはまったく反対の解釈がなされている。マロリーは未登峰としての世界最高峰に登る精神のことを語ったのであるが、一般的な「山があるから」といった俗物精神とは正反対である点について、すでにこれまでも何度も指摘してきたのでここでは書かない。(注)それが山の世界についてはほとんど知らない一般の人々であればともかく、日本山岳会の会員の書いたものの中にも、こうした根本的な間違いがあるのに驚いている。そこで提案

だが、本誌で、マロリーが語った最も初めの言葉を証明する「ニューヨークタイムズ」の記事を翻訳して掲載したらどうであろうか。この記事はまだ日本語として全訳されていないと思う。

すなわち「ニューヨークタイムズ」一九三二年三月十八日付の紙面で、マロリーへのインタビューが掲載されている。詳しくはその本文を見ればよいことだが、私の手元にその日本語訳があり、もし本誌がその意向であれば提供したいと思っている。ただし、この訳者は山の世界についてはまったく素人である上に、いわゆる「英語屋さん」でもないの、日本山岳会の会員の中に、このことに関心があつてイギリス語に自信のある方があれば、この原稿をチェックして完成品にするような形で見てくださいますでしょうか。

(「訳者」は二人共訳としてもよい)分量にすると、四〇〇字詰め原稿用紙で、たぶん十数枚だと思います。会報「山」に一度に載せるのが多すぎるとしたら、三回くらいに分ければよいのではないのでしょうか。

Because it's thereの俗訳と大誤解に決着をつけるには、やはり本誌が適当ではないでしょうか。

(注)たとえば拙著「山を考える」(朝日文庫)収録の「みんなが登るから」参照。

「山」六五四号「モン・ブラン情報」に補足

近藤 等

■伊藤敦氏のモン・ブラン登山

成田発八月一日、翌二日は早速モン・ブラン・ド・タキュル、三日にグーテ小屋に登り、四日にモン・ブランを登頂して下山。

時差ぼけをものともしないで、この二回の山行を六十四歳の伊藤会員が実行なさったことは、誠に賞賛に値する行動だが、この記事を読んで「では自分も」と気軽に思われては大変困るので、補足させていたたく。

一九六五年から一九八〇年代後半まで、シャモニの夏のキャンプ場は山学同志会の人たちをはじめ、困難

な登攀を目指す、実力のあるハングリナーな若い日本人クライマーであふれていたが、一九九〇年代に入ると、この人たちは忽然と姿を消し、モン・ブラン一周のトレッキングとモン・ブラン登頂を目指す中高年の人たちが大勢やってきた。

モン・ブラン登山については私が執筆した『ヨーロッパ・アルプス』(実業之日本社、ブルーガイド海外版)で、モン・ブランは「対一」(ガイド一名に客一人)を強調しているが、アルプス・ツアーを発表している旅行代理店によつては、料金を安く見せかけようとしてガイド一名に客二人と指定してあるのがまだ見受けられる。これはとてもない間違いだ。気心を知り合った仲間二人ならまだよいが、ツアーに参加して初めて出会った二名のうち登山中に一名が落伍したとする。ガイドは直ちに下山を決定。登頂できる体力があった者も一緒に下山を強いられ、大変気まずい思いをすることになる。

一万円少々を節約したつもりで、登頂を台無しにしたのでは全くもつたない。モン・ブランに登りたいなら、くれぐれもガイドと「対一」をおすすめする。

伊藤氏は存じ上げないが、体力に優れた方だったからこそ短期間で登頂に成功なさったのだと思う。J A

Cの会員でも伊藤氏と同年代の大森久雄君、それに山田二郎元会長は七十代に入ってから登頂なさっているが、前述のように自分も大丈夫と早合点しないことが肝心だ。

大森君は毎夏アルプスの四〇〇〇メートル峰を登っているし、山田元会長はヒマラヤでの高所体験が肉体的精神的にプラスになっていたはずだ。脇坂順一氏が七十歳を超してからモン・ブランとマッターホルンに登頂なさっているのは絶賛するが、教授は全く別格のスーパーマンだ。ではモン・ブランを登るにはどの程度の体力があればよいのか？

伊藤氏は渡欧前の二カ月間、毎週中アの経ヶ岳、烏帽子岳、八ヶ岳、木曾御岳、南アの甲斐駒ヶ岳、富士山(吉田口、須走口、各五合目から登り五時間下り二時間)などに登り、速歩と頂上滞在二時間のトレイニングを行ったという。私が考える必須条件は、残雪の富士山を五合目から四時間以内で登頂、往復六時間で登頂を終了できることである。登頂に五時間なら、疲れはするが晴天に恵まれれば何とか登れるだろう。六時間かかるようでは絶対に無理だ。富士山を何回も登って登高タイムを四時間まで縮めるように努力することだ。私自身も五十代から六十代では必ずシーズン前の五月から六月末

にかけて、東京の自宅から日帰りで三回は富士山に登り、高所での体力トレイニングに励んだ。

伊藤氏は一週間の予定で出かけ、モン・ブランに登ることができたが、これは真に幸運に恵まれたからで、誰でも一週間あれば登るチャンスがあると思うのは、これまた見当違いだ。私の大学の後輩、土沢信明君は伊藤氏と同じように、数年前、シャモニ到着の翌日にモン・ブランに登頂しているが、二十代で体力抜群だったからで、これもきわめて例外的なケースだ。

一週間という期間は最小限で、なるべく長期間滞在するプランを立てておくことだ。私自身、まる二週間ぶつ続けて悪天候のため行動不能の夏を体験したこともある。

グーテ小屋は予約しなくても伊藤氏が書いてるように泊まればするが、寝床の配給に天手古舞いしている小屋番に迷惑をかけないように予約したほうが望ましい。それに予約した者が優先で、満員だと食堂でゴロ寝ということになる。

小屋の標高は富士山頂とほぼ同じだから、高所に慣れるのに、六月頃の富士山頂でビバークしておく大変よい。小屋に泊まった翌日、動けなくなってしまう日本人もかなりいるから要注意。

予備日のガイドの拘束料は高山の場合一五〇〇フラン(約三万円)、スイスでもほぼ同じ料金。

伊藤氏は八月四日に登頂なさったが、モン・ブランの場合はなるべく七月のほうがよい。グーテ上部の積雪量が多いからモン・ブランの一般ルートでの唯一の危険地帯、グーテ小屋下方のグラン・クロワールのトラバースで、上部からの落石に見舞われる危険が少ないのが最大の理由。それに山はどこでも八月ほど混雑していない。八月には一日三百名ほど登頂する。

グーテ小屋経由のほか、最近はいミディのロープウェイ山頂駅に近いコズミク小屋に泊まってスタートするケースが増加した。このコースだとモン・ブラン三山を縦走できる。すでに高所に慣れている人たちにすめられるコースだ。

伊藤氏は小屋の夕食がほとんど喉を通らなかつたそうだが、日本時間にすれば午前三時頃だから、まだ時差の影響があつて胃が食物を受けつけなかつたのだらう。

フランスの山小屋で出されるパンは日本というフランス・パンで軟らかい。しかしスイスでは、小屋によつてはコチコチの黒パンを出されることがあるから、食べやすいパンを持参したほうがよい。もっともパン

を持参すると軟らかいパンが出され、持参しないと硬い黒パンが出てきて、苦笑した体験を私は何度かしている。

なお中高年の方にすすめるのは、キャラメルのように二十四個がケースに入ったGlycoramin、血液の循環をよくして呼吸を楽にするエネルギー源だ。スイスのガイドがへばつた客に与えているのを見かける。スイスの薬局ならどこでも売っているが、フランスでは売っていない。グリコラミンを覚えてくれたのは加藤保男君で、タイガーバウムも教えてもらった。彼のようなスーパークライマーがこうしたものを愛用していたのは驚きだった。

「一人では行けない、でも行きたい。」
それにお応えするのが実体験に基づいた
アルパインツアーの旅づくりです。

ゴールデン・ウィーク・カトマンズ行(名古屋)予告

ヒマラヤ
越えフライト
〈第6回〉

ヒマラヤ越えが魅力の特別運行便
ボーイング757、機窓からの大パノラマ

4/29(土)から5/7(日)まで

お・申・込・み・は・お・早・く!

運輸大臣登録一般旅行業490号/日本旅行業協会正会員

ALPAIN ツアー サービス 株式会社

〒105-0003 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911
大阪 ☎06(6444)3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557

伊藤氏は荒れ模様の天候下での登頂体験からか、ザックにはテルモス一本だけを携行すればよいと書いておられるが、私はチューブ入りのコンデンス・ミルク、チョコレート、ドライ・フルーツ、ドロップの行動食を必ずルックザックかポケットに入れていた。万一のビバークに備えるとともに、行動中でも口に入れやすいからだ。

■マッターホルン登山について

伊藤氏は来年マッターホルンを目指しておられるようだが、今夏の行動タイムからすれば体力的には一〇パーセント可能で、ぜひ登っていただきたい。

マッターホルンを登りたいと思う日本の登山者は、難しくはないが距離的に長い岩場(マッターホルンのヘルンリ稜は高さ二二〇〇メートル)を速いスピードで休まずに登り続け、下降するトレーニングをしておくことが肝心だ。スピードに慣れていない日本人登山者は、ガイドは急ぎ立ててばかりいると愚痴をこぼすが、安全に登り登頂の確率を高めるには、スピードは不可欠だ。

マッターホルンの岩稜は急峻でないから、モン・ブランとは反対に、七月より八月のほうがコンディションがよいことが多い。北東ヘルンリ

稜はツエルマットの谷から眺めるほど急峻ではなく、傾斜は平均三九度だから、岩の間の残雪が消えて乾いた山稜になっているケースは八月の方が多からだ。ただしガイド組合(最初の予約は二週間前に入ること)では、なるべく八月一日〜十五日は避けるようにとすすめている。モン・ブラン同様山が大混雑し、岩場での順番待ちに無駄な時間を費やしてしまうからだ。

ガイドは強引に客を引き上げてガイド・レスのパーティーを抜いて行くから、ガイドがリードしている場合、登山者に体力があり岩に慣れている、さらに晴天なら、登頂は可能だ。ただ一九九九年の夏に例をとってみても、晴天で山のコンディションがよく、登頂が可能だったのは二十日ほどに過ぎなかった。日程に余裕をもつことが大切で、事前にプライトホルンなどに登り、高所に慣れおくことが必要不可欠だ。

＊

なお最後にどうしても書いておきたいことがある。

マッターホルンはアルプスで日本人のアクシデント(とくにヘルンリ稜の下降で疲労のためバランスを崩してスリップ)が最も多発している山だという悲しい事実だ。

一九六五年以降、昨夏までガイド

を同行していなかった三十名近くが残念ながら死亡している。くれぐれも慎重な行動をしていただきたい。

さらに、ガイドが同行していれば一〇〇パーセント安全と早合点してはいけない。ガイドは経験豊富だから信頼するのはいいが、とくに初めて知り合ったガイドに、客となる登山者の技術と体力に関するすべての判断と責任を負わせるのは無理である。山登りという危険を伴うスポーツでの行動の最終的な判断とその責任は自分で負うべきものだ。

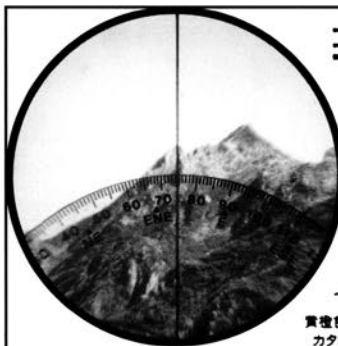
昨年の九月初め、フランスのナンバーワンのクライマーで、シャモニ・ガイド組合のクリスチャン・プロフィがディアブル針峰の縦走に案内したバリの客が天候悪化と疲労が重なり、ビバークを余儀なくされたが、その結果死亡というアクシデントが発生し、目下問題になっている事実もつけ加えておく。

マッターホルンでのアクシデントを最後にひとつ。UIAA元会長だったスイスのジャン・ジュージュ氏はアイガーとグランド・ジョラスの両北壁の最高齢完登者だった。彼をリードしたのはスイスの名ガイド、ミシエル・ヴォシエだった。

ジュージュはマッターホルンの北壁も登りたくなり、ヴォシエに相談したが、ヴォシエはジュージュが高

コンパスグラス HB-3

広視界10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目標がそのまま正しい磁気方位です。



重量78g.
つや消し黒 ￥17,000 送料 ￥600
実色メタリック ￥18,000 消費税込
カタログ代無料、電話、FAX、来書でどうぞ
〒177 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号
TEL 03-3928-5411 FAX 03-3928-5411

株式会社 石神井計器製作所

齢になりすぎたので北壁は体力的に無理との正しい判断を下して、申し出を受けつけなかった。

そこでジュージュはツエルマットの若いガイドをパートナーに選んで北壁に出かけ、見事完登した。そこまではよかったのだが、山頂からの下降ですぐビバークになり、翌朝にはジュージュは息絶えていたのだ。

この大ベテランの死は、アルピニストにふさわしい壮烈な最期と思う、と当時のツエルマットの観光局長のカシャ氏は語ったが、私は中高年の登山者にとつてよい教訓にはなっただけで、避けることができたアクシデントだったと残念に思えてならない。

INFORMATION



イラスト・村上直温

自然保護シンポジウム 「森をつくり、学ぶ」を開催

国有林をお借りして森づくりの林業体験の試みを考えています。試案のための会合を開きます。関心のある方は奮ってご参加ください。

期日 三月十一日(土)、十二日(日)
場所 高尾グリーンセンター
(梅ノ木平)

日程 十一日 十四時京王高尾山口
駅集合

十二日 高尾山登山

定員 二十三名

申込 住所、氏名、会員番号を明記

の上、ハガキで 川越尚子宛

(〒一八五・〇〇一一 国分

寺市本多三・七・三二)

締切 二月末日

*申込者には詳細案内を送付します。

講演会「マッキンリー気象観測登山

隊報告」

科学委員会・学生部指導委員会

一九九〇年から一九九九年まで、気象遭難防止を目的に観測データを収集しつつ、毎年マッキンリー登山を果たしてきた登山リーダー、大蔵喜福氏に、その登山活動について講演していただきます。

日時 三月十六日(木) 十八時三十分

講師 大蔵喜福氏(科学委員会委員)

テーマ 「マッキンリー気象観測登山隊報告―十年間の登山をふりかえる」

会場 日本山岳会集会室

問合せ 北野忠彦(〇九〇・三〇四

六・一一八九・携帯)

第二回「森の勉強会」

東海・京都・関西三支部

自然保護委員会共催

登山者の心に潤いを与える日本の

山のよさは、多種類の樹木からなる

自然林にあります。森の見方の基礎

を学んで山の楽しみ方を広げるため、

緑の森の奥深くに分け入りましょう。

今回は三支部のほかに、会員全般から

も募集します。

期日 五月二十日(土)〜二十一日(日)

集合 十九日夜現地

場所 ①文化協会自然保護研修所

(滋賀県高島郡朽木村麻生

一三六ヘクタール)

②芦生の森(京都大学演習林

など京都府北桑田郡美山町芦

生、五〇〇〇ヘクタール)

テーマ 森の生態系、森の見方(座

学)、実際の森はどうなっているか(山行)、今回は山行に重点をおく。

講師 森の研究者およびインストラクター

対象 会員

定員 十五名

参加費 一万八千円(二泊五食)

交通 JR湖西線(安曇川駅)から車で三十分)またはマイカー

責任者 橋村一豊(東海)、秋野子

弦(京都)、坂下幸一(関西)

申込 三月十七日までにFAXかハ

ガキに、会員番号、氏名、年齢、住所を明記の上、猿山昌夫宛

(〒五二〇・〇八六四 大津

市赤尾町二七・一二 FAX・〇

七七・五三四・七二四三)

*申込者には詳細案内を送付します。

春の甲州高尾山親睦ハイク

97同期会

甲州高尾山と棚横手山に登り、桃

とブドウの里をめぐるります。

日時 四月八日(土)

集合 JR中央線勝沼ぶどう郷駅

十時

行程 勝沼ぶどう郷駅〜大滝不動尊

〜棚横手山〜甲州高尾山〜大

善寺〜勝沼ぶどう郷駅(歩行

約三時間三十分)

申込 三月末日までにハガキで日本

山岳会事務局97同期会メール

ボックス宛

問合せ 池谷健(TEL・〇四三・六

六・二四八五)

第三回山行「坪山」

98同期会

ヒカゲツツジの満開が楽しめます。

98同期会員以外の方も、ぜひご参加

ください。大歓迎です。

日時 四月二十二日(土) 雨天中止

「前夜十九時降水確率四〇%以上」の場合

集合 JR中央線上野原駅改札口

八時三十分

行程 上野原Ⅷツ田向橋〜天狗岩

〜坪山〜阿寺沢Ⅱ上野原駅

(歩行約四時間三十分)

費用 約四千円(東京起点の交通費)

持物 日帰りハイキングセット

申込 四月三日までにハガキに会員

番号を明記の上、海老沼清宛

(〒三三三・〇〇二二 川口

市西川口一・二七・一四

TEL&FAX・〇四八・二五五・〇

一六六)

後藤三男 油絵・水彩画展

期日 三月十二日(日)〜十八日(土)

十二時〜十八時三十分

会場 東京交通会館B1ホールドサ

ロン(千代田区有楽町二・一

〇・一) JR有楽町駅前

(TEL・〇三・三三五一・七九三三)

会務報告

十二月理事会

日時 十二月八日 十八時三十分～
二十時十五分

場所 日本山岳会会議室

「出席者」大塚会長、小倉、大森、竹内各副会長、西村、村井(龍)、森、宮崎、高原、勝山、村井(葵)、高遠、宮下、鰐坂、松原、増山、坂井、河西、坂本各理事、神崎、中村各監事、中川、吉永各常任評議員「委任」山本理事、平山、平野、田邊各常任評議員

●議事に先立ち会長就任半年を迎え大塚会長より以下の挨拶があった。

●晩餐会を通じて本会はいくクラブだと思った。そして役員はクラブサービスを担当するサーバントであると確信した。「会員を大切にする」を伝統にしてみたい。

●十二月四日開催の支部長会議は、本部からの伝達に終始した感がある。支部会員の意見を取り入れたい。

●「山に登る会」との認識を常にもちたい。

【審議事項】

一、表彰制度の検討(西村)

既存の「秩父宮記念山岳賞」に加え

表彰制度を検討したい。メンバーは西村、村井(龍)、森、宮崎各常務理事、中川、吉永、平山、平野、田邊各常任評議員、平林、尾上各評議員、高原理事の十二名。(承認)

二、名義協賛願(西村)

日本勤労者山岳連盟より創立四十年記念事業「P・シュールト氏を迎えての全国縦断記念講演会」の名義協賛。(承認)

三、資料調査、借用願(西村)

東京都北区教育委員会から、平成十二年秋季に予定している特別展(北区飛鳥山博物館)に出展する、冠松次郎氏および交友会員にかかわる資料の調査および短期貸し出し写真撮影。(承認)

四、冠松次郎氏寄贈の写真乾板などの東京都美術館への寄託(鰐坂)

冠氏の遺族より、故人の原稿、地図、写真乾板二百五十九枚を含むメガフィルム、プリント写真などの寄贈を受けているが、保存環境の整った東京都美術館より寄託を受け入れ預かるとの返答があった。(承認)

*小倉副会長の意見として、ガラス乾板からの紙焼きでは乾板が痛むので、インターネガを起す必要があると思うが、その場合は費用調査を。五、写真借用掲載願(西村)

(例)ハユマより、(株)日本図書センター四月刊行予定の「目で見る人間図

今年もさくらで会いましょう

書館(仮称)へウェストンの写真借用および掲載。(承認)

【報告事項】

一、十二月四日開催の支部長会議では、本部からの報告のほか、支部から以下の意見が出された。(西村)

①広島支部より、二〇〇二年全国支部懇談会の開催地に立候補し、支部会員の賛同を得た。

②百周年行事として行われる『新日本山岳志』について、いろいろと意見があるようだが、趣旨および出版の主体なども明確にする必要がある。

③平成十二年度の年次晩餐会写真展企画は各支部より活発な意見が出された。

二、十一月十九日に実施された秋田支部創立四十周年記念行事に出席の報告。(大森副会長)

三、平成十二年度事業計画、予算編成の方向付けについて、常務理事会を二月二十四日十九時開催。(西村)

四、その他提案(神崎)

●一九七〇年、一九八〇年とエヴェレスト登頂はどちらも五月十一日だった。二〇〇〇年は三十、二十周年にあたる。年次晩餐会の企画に……

●青少年育成活動の一環として、登

山界に奉仕できる企画がほしい。

【委員会報告】

総務委員会・西村、高原

●年次晩餐会は十二月四日十八時より新高輪プリンスホテルにおいて六百二十一名(当日キャンセル二十九名、実質参加者五百九十二名)の参加で盛会裡に終了。

●一九九九年版会員名簿を刊行し晩餐会当日配布。

科学委員会・森

十一月二十七日、明治大学においてフォーラム「登山用具の新知識、選び方と使い方」を、講師に大蔵喜福氏、越谷英雄氏(ICI石井スポーツ)を招いて開催。参加者百余名。学生部指導委員会・宮崎

●十一月十三日、大学山岳部監督会議を開催、二十校五十名余の参加。

●十一月十四日、皇居マラソン大会を実施、参加は二十大学二十六チーム、総勢百名以上。

●十二年一月二十九、三十日、樺池にて雪崩ピーコンの講習会を予定。

●三水力発電計画実行委員会・坂本十一月十九日小屋完成、二十二日試運転を行った。予定の一キロワットに近い九〇〇ワットの発電に成功。

高所登山委員会・坂井

日本人の八千メートル以上の峰の登頂者へのアンケート実施を予定、四団体で協力しながら進める。

会報編集委員会・村井(葵)

十二月号は岐阜支部による全国支部懇談会の報告、ほか。

自然保護委員会・河西

千葉県山岳博物館施設に自然体験の場として県有林を利用するという話がある。同じ趣旨で国有林(裏高尾)を開放する案もある。「JACCの森づくり」となればよいのだが。

財務委員会・村井(龍)

●会計状況は予定通り。

●法人の監査は「外部で」との閣議決定があった。今後注目したい。

●文部省の指導要領により、事業費は総支出費に対して五〇パーセントを超えるのが望ましい。

●平成十二年度予算請求は一月三十一日を締め切りとするので、各委員会とも予定してもらいたい。

海外連絡委員会・増山

●アメリカン・アルパイン・クラブ(AAC) 元会長のニコラス・クリンチ氏のアドバイスによりAAAJ編集長であるクリスチャン・ベックウイズ氏がAACの代表として来日を希望している。窓口は海外連絡委員会の中村委員が担当。

●十一月十五、十六日、インド・ニ

ューデリーで開催されたインド登山財団(IMF) ミレニアム会議に大塚会長の代理として出席。ナンダコットから始まったインドとの長い交流の歴史と最近の代表的な登山をスライドを交えながら紹介した。

●十二月二日、ネパール大使館公邸で開催されたネパール政府観光局のダンジ氏歓迎レセプションに増山が出席した。

■会員異動

物故

井栗 登 (二二六九七)	99・5
池田知幸 (三三六九)	99・9・12
中楚愛三 (二四七八)	99・9・27
安田 武 (六四四四)	99・10・2
中島富雄 (一一一三七)	99・11・21
神保信雄 (二八三二)	99・11・29
松長晴利 (三七一六)	99・12・2
広羽 清 (三二五七)	99・12・16
斉藤 裕 (二七三六)	99・12・19
退会	99年12月31日
大賀二郎 (五五六九)	
長村 仁 (七五二一)	
児島琢摩 (一一四五八)	
神 憲明 (八〇〇三)	
菱田昌子 (二二一九)	
高城和義 (七八五五)	
終身会員	
吉田理一 (八四二八)	

ルーム日誌

12月	総務委員会
1日	総務委員会
2日	総務委員会
3日	総務委員会
4日	年次晩餐会
6日	総務委員会
7日	常務理事会 高所登山委員会
8日	アルパインスケッチクラブ
9日	学生会 会報編集委員会
9日	学生部 アルパインフォトビ
13日	秩父宮記念山岳賞合同会議
13日	アルパインスキークラブ
14日	資料委員会 二火会 アルパ
14日	インスケッチクラブ
15日	山研・ミニ水力発電実行委員
15日	会 三水会
16日	科学委員会 学生部指導委員
16日	会 遭難対策委員会 98同期
20日	総務委員会 図書委員会
20日	自然保護委員会 集会委員会
21日	アルパインスキークラブ
22日	緑爽会
27日	99同期会

12月来室者547名

訂正

『山岳』第九十四年(一九九九年)の「海外登山の記録」写真のページ第一ページの写真説明が上下入れ違っていました。お詫びして訂正します。

『山岳』編集委員会

◆編集後記◆

ミニ水力発電実行委員会の粘り強い努力で、上高地山岳研究所に水力発電装置が完成しました。

昨秋の十一月二十二日、試運転に成功し、いよいよ五月中旬から本格的に稼働する運びです。自然と人の営みを調和させたクリン・エネギーは、地元の人たちにも歓迎されています。

ぜひこの機会に、上高地に足を向け、優雅なコテージライフを堪能してください。

若い管理人木村太郎、弥生夫妻も今年で三年目、はりきって皆様をお待ちしています。

(村井葵)

日本山岳会報 山 657号

2000年(平成12年)2月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 大塚博美

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社